

(株)アグリス・ワン

国内産の銘柄牛・豚を集荷処理
MCグループの生産物流拠点に

阿部昌史代表

食肉総合メーカーのミートコンパニオングループ(MCG)の一員であるアグリス・ワン(阿部昌史代表取締役)は、HACCP方式による衛生管理体制の確立により、品質管理および衛生検査は、食品衛生研究所と一体となりと体から部分肉、内臓、作業環境、設備、水質、鮮度などあらゆる項目の検査の実施で、安全・安心を担保している。部分肉格付認定工場番号は第G-380号。全農安心システム認証と畜・加工場でもある。

平成22年度の取扱高は33億円強。牛と畜頭数は1万5,013頭(対前年比103.9%)、豚は4万8,199頭(同98.7%)で、牛の品種別構成比は和牛が24%、交雑種が37%、ホルスタイン系・その他が39%となった。産地別では北海道からが全体の2割、東北から1割強、関東6割弱、九州・沖縄・その他で1割強となっている。

23年度計画は、牛が1万5,000頭強で、豚は5万頭強といずれも前年度実績を上回る頭数を見込む。部分肉は、牛で1日約40頭で、年末は48頭を加工できる業界トップクラスの能力を有する。22年度実績は8,700頭以上で、23年度計画は9,000頭を目指す。

集荷対策では、国内産の肉牛・肉豚生産への取り組みを強化しながら、生産者とともに産地ブランドの開発に取り組んでいく。これまでにも産地育成では、自然素材の「五穀牛」や「おきなわ和牛」「彩さい牛」など多くのブランド牛を生産者とともに育ててきた。

新たな取り組みでは、栃木県産の「さくら

和牛」と埼玉産の「夢見牛」を手がけていく。「さくら和牛」は、栃木県さくら市でハーブなどの特殊な飼料を与えて肥育した健康で良質な肉牛。また「夢見牛」は市場の交雑牛ニーズの高まりと頭数減に対してのもので、両ブランドとも品質や価格面でマーケットに適応した商品と考え積極的に取り組む計画。

販売政策では、MC・グループと一体となつた産地ブランド政策を積極的に取り組んでいく。枝肉研究会や販促会の実施など産地育成へのバックアップはもちろん、獣医師が第3者認証した安全・安心の肉牛である「農場管理獣医師協会認証」の「FMVA認証牛」も、獣医師と生産者が一体となり肉牛の健康管理を行っているので、放射能物質汚染問題なども含めて、安心・安全な肉牛として消費者に提供できると考えている。

また豚でも「TOKYO-X」を始めとするプレミアムポークなどのブランドポークをはじめ、一般豚まで生産者と獣医師、MCグループの3者が一体となって生産・販売に取り組んでいる。

施設はスピーディで衛生的な解体・加工作業を実現すべくオンラインシステムを導入し、ワンウェイ生産方式(副産物も別ラインに隔離処理)で、と畜から加工までを外気に触れることなく処理できる。今後は生体牛1頭ごとの口周辺検査や表面温度計による体温チェックなどの口蹄疫対策を含め、衛生管理者を中心に食品衛生研究所と一体となり衛生的で安心・安全な商品づくりに取り組む。